史探訪講座『昭和を見る』　　2017.10.4

北名古屋市歴史民俗資料館と『揚輝荘』の見学

今回の講座は一日目の講義を聴くことが出来ませんでしたが、二日目の見学会に参加することが出来ました。タイトルにある『昭和』の生活がどのようなものであったか、生活用品・おもちゃをはじめ、暮らしの根幹をなす『水』の利用がどのような進化を遂げたのか見分しました。そして、松坂屋の創業者『伊藤次郎座衛門』の活躍と彼が残した『揚輝荘』の見学をしました。

1　懐かしいおもちゃと生活用品

最初に尋ねたのは北名古屋市の歴史民俗資料館、北名古屋市は名古屋市との合併を模索しているニュースが流れています。人口は８６．０００人、バスで走ると市役所の隣をはじめ街並みの続くあちこちにも田んぼがあります。いかにもにわかに発展した証であり、現在発展中という景色です。

①　昔の展示品を使い『回想法』を取り入れた取り組み

歴史民俗資料館は図書館と一緒に同じ建物内にあります、こうした作り方はなかなか合理的だと思いました。そして、係の方から説明を受けましたが、その中でなるほどと思ったことが一つあります。それは、私たちもすでにその年代になっていますが『回想法』ということで、昔の生活様式など見てもらうことで昔を思い出し、脳の働きを活性化させる取り組みをしているといいます。たくさんのお金を使ってこれだけの施設を維持するわけですから、なるほどと思える施策を行わなければ存在価値が問われることになります。私たちふるさとガイドも同じ考え方から、施設やディーサービスの皆さんに昔のことなどお話をする取り組みをしており共感しました。

②　見学していると参加者同士が自然に話し合える

おもちゃや駄菓子が並ぶ店先が再現された中に、いろいろなタバコが並んでいました。それを見た愛煙家の面々が『俺は光だったとか、いこい、いやいやキザミだ』と話しが弾んでいました。今は受動喫煙が問題にされる世の中ですが、アメリカの銃規制が一向に進まないのと同じように、問題ありなのに改善策の決定打がだされません。おもちゃといえばブリキのロボットとか潜水艦がいくつも並んでいましたが、みな異口同音に『こんな立派なおもちゃは買ってもらったことはない』と口をそろえていました。

家電の中で洗濯機もいろいろ並べられていました、その中に一つだけ小さな丸い形の物がありましたが何なのかわかりませんでした。でも、よく見てみると横文字から判断して洗濯機でした。昭和でも一桁の時代に流行したのでしょうか? 食器や食品・レコード・ラジオ・農具などありとあらゆる物が、それもたくさん展示されておりよく集めたものと感心しました。

これらを見学していると、参加者はよく知った友達同士ではないのに自然に話し合うことが出来てしまいます。これも回想法による効果なのでしょうか。

③　　昔の名車パブリカ 800 とスバル 360

地下に降りると駐車場の一角を使って、ミゼット・観音開きのクラウン・パブリカ・スバル 360 などが展示されていました。久々に目にした往年の名車は、今でも色あせることなく輝いて見えました。私自身も最初に買った車はパブリカの中古車でした、とても懐かしかったです。空冷式 800cc のエンジンを載せ、トヨタが出した国民車と言われたものです。今見てもなかなかコンパクトにまとまったデザインだと思います。赤字覚悟で復刻版を発売したら、かなり売れるのではないでしょうか?

スバル 360 には乗ったことはありませんが、軽自動車でありながら大人 4 人が乗っても余裕で走り回れる車だったようです。しかし、その開発は困難の連続であったといいます、特に最初のころは箱根の山を超えることが難しかったといいます。このスバルを生んだ富士重工は昔のゼロ戦を作った会社で、その技術力は本物だったようです。現在でも、大手のトヨタ・日産とは違い『水平対向式エンジン』をひっさげてアメリカで気を吐いています。

2　名古屋市における水の歴史

次に向かったのは『名古屋市水の歴史資料館』です。簡単なパンフレットをもらっただけなので、細部は覚えておりませんが、説明の主な点は名古屋の上下水道について①江戸時代の上水道②名古屋の下水道の歴史についてでした。

① **尾張藩時代の様子**…最初の展示室に入ると木製の樋みたいなものがありました。水を通すのに四角いものなので、はて穴あけはどのようにしたのかと思ってしまいました。が、何のことはない、板を四角に組み合わせたものなのです。こんなことが浮かんでこないくらい、頭が固くなっているのだと思い知らされました。これを四角い箱で繋いでいましたが、中には竹も使われていました。竹を使うにしても芯を取り水を流すようにするには、長い鉄棒みたいなもので穴を通したのでしょうか。昔の人は何もない中でどのようにすればよいかを、必死に考えたことで素晴らしいアイディアを生み出したのだと思いました。それに対して私たちは、そんなに考えなくてはならない必要がないので浅茅知恵しか出せないのかな。

② イギリスのバルトンが指導した日本の上下水道

明治２０年日本政府はスコットランドのバルトンを、帝国大学衛生工学初代講師に招きました。彼は

東京市浄水下水調査主任として、上水道の設計を完了したほか大阪・神戸・広島・仙台・名古屋・福岡・門司などの上下水道の調査・設計を指導しました。明治２７年には名古屋市給水工事に関する意見書と工事設計報告書を内務省に提出しました。

その後明治３９年に下水道敷設を市議会で議決し、４１年に認可が下りました。敷設工事の主要部分が完成し大正３年に鍋屋上野浄水場から給水が開始されました。そして、昭和５１年岩屋ダムが完成(名古屋市初の水源施設)。平成２６年９月には水道給水 100 周年とのことです。

一方、下水道は大正 12 年に創設工事が完了し、昭和５年堀留・熱田下水処理場(日本初の『活性汚泥法』による水処理を開始)が運転開始となりました。平成２４年１１月に下水道共用開始 100 周年です。

こうしてみると名古屋市の上下水道の取り組みは、国内でも先頭を行っているようです。係の方の説明は大変上手で、わかりやすく水の大切さがよく理解できました。子供たちの勉強だけでなく大人も見学して、その説明を受けることは重要だと思いました。

3 覚王山日泰寺にお参り

ここのお参りはバスを駐車するための方策でしたが、どのようなお寺さんなのか理解することが出来ました。お寺さんのパンフレットによれば、お釈迦様の遺骨は死後 2500 年の間に一度だけ発掘されたとあります。１８９８年イギリス人のウィリアム・ペッペが北インドのピプラーワで発見しました。その骨壺に刻まれたインド古代文字の解読によって仏骨と分かりました。インド政府はその仏骨を仏教国タイに贈りました。その一部が当時のタイ国王チュラロンコン陛下より日本に贈られてきました。

その仏骨をお祀りするために、日本仏教全宗派が協力して建立したのが日泰寺です。明治３７年のことです、ですから日泰寺は宗派がなく、仏教全宗派の寺といえます。そして、覚王山というのは『覚りの王』つまりお釈迦様のことです。さらに、日泰寺とは日本とタイ国の意味です…と説明されています。

そして、ここの山門には金剛力士像ではなく、お釈迦様のお弟子さんの像が左右にあるのが特徴だといいます。なぜそのような造りになっているのかは聞けませんでしたので、よく分かりません。

このようなお寺さんは運営資金をどのような形で調達しているのか、これもよく分かりません。私たちのガイド活動でさえそれなりのお金がなければ運営できません。こんなに立派なお寺さんを維持していくには、相当なお金が必要になるはずです。檀家もないのですから、いわゆる固定給に相当するものがなくては無理と思いますが、永代供養のお金だけでできるのでしょうか、それとも大口の寄付があるということでしょうか。世の中の仕組みはとても複雑怪奇と思えてきます。

4 伊藤次郎左衛門と揚輝荘

めちゃくちゃ詳しいガイドに困惑

最後は今回のメインである揚輝荘を見学しました。松坂屋初代の伊藤次郎左衛門が建てた、いわゆる

迎賓館ということはわかりました。しかし、私たちのガイドさんは松坂屋の OB でものすごく博識で、ペラペラと次から次へ話を展開させていきます。そのため、とても理解が追いつきません。それだけの内容があるのだから致し方ないと言われればそれまでだが…しかし、私たちのガイドも同じことでお客さんはガイドに比べれば、知識情報ははるかに少ないのが普通です。したがって、大まかなことだけを丁寧に説明して、あとは付け足し位に説明すると理解しやすいと思っています。

一つのことをふうむふうむと聞いていて、がらりと違う話が展開しては双方とも理解するのは困難になってしまいます。有料のガイドはこれでなくてはいけない、と打ちのめされた気分です。でも、私には納得できません、やはりお金をもらって説明するのであれば、お客のレベルに合わせて行うことが出来てこそ一流だと思っています。

ガイドの説明で覚えていることは、伊藤次郎左衛門佑民は身長 170cm ほどだったとか。当時としてはかなりの大男といえる。その彼は奥さんとの間に７人の子供を設けるが、奥さんは早死にしてしまう。その３年後に１９歳の娘と結婚して３人の子供を設けている。お金持ちだから生活に困ることはないものの、その方はかなりお元気な方だったといえるようだ。

また、海外のあちこちを見て回り広く見聞を広めて得た知識と情報に基づき、この建物を設計しているという。その造りは材料に一流のものをふんだんに使用して建てられているのと、外国の人にも使いやすいように設計されているということです。その例として、階段は横並びで話しながら登れるように幅が広く造ってあるというのだ。

揚輝荘の見学なので、建物中心に説明してくれるのはやむを得ないが、私としてはあまり面白い説明ではなかった。何というか、これでもかこれでもか、と責められているような気分がしてならないのだ。つまり、知っている情報をすべて説明しなくてはと、張り切りすぎている。このことは私のレベルがその程度の理解力しかないということだろう。

ガイドの説明はそれとして、立派な建物と立派な庭は素晴らしくて、名古屋市の指定有形文化財になっている。このような立派な施設を造り、諸外国の人々とも交流を深めた名古屋の生んだ先駆者であったことが分かりました。

揚輝荘の概要

① 聴松閣

メインの建物で地下一階、地上二階建ての山荘風の外観をした迎賓館で、昭和１２年に建築されました。各部屋は各国の様式がミックスされており、地下は全体がインド様式です。

②南庭園

回遊式の枯山水庭園で、散策路には名石・奇岩に加え五輪塔、手水鉢、大灯篭などが配置されています。

③ 揚輝荘座敷

大正 8 年に矢場町にあった屋敷を移築したもので、ベンガラ色の土壁と杉皮張りの腰壁には優雅な雰囲気が感じられます。

以上が南園で、これより 2 倍ほどの広い北園があって、ここには北庭園と三つの主な建物があります。

それと、ほかには土蔵や稲荷神社もあります。

揚輝荘の歴史

① 大正 7 年(1918)　本家から移築『揚輝荘』と名付ける
② 大正 12 年(1923)　このころから皇族・華族・文化人など来荘
③ 昭和 9 年(1934)　次郎左衛門インドなど仏跡巡拝の旅
④ 昭和 11 年(1936)　初の外国人留学生をタイから迎える
⑤ 昭和 15 年(1940)　次郎左衛門永眠す
⑥ 昭和 20 年(1945)　空襲で多くを焼失・米軍司令官宿舎として接収
⑦ 昭和 27 年(1952)　米軍接収返還
⑧ 昭和 29 年(1954)　松坂屋の社員寮に
⑨ 平成 19 年(2007)　名古屋市に寄付
⑩ 平成 20 年(2008)　名古屋市指定有形文化財に

松坂屋の商標

揚輝荘の入り口手前に 1.5m 四方もある、彫刻の施された建物のかけらが置かれています。これは昭和 5 年伊藤銀行本店の正面に飾られていた『いとう丸』と呼ばれた銀行・百貨店の商標。この図柄は伊藤家を表す『藤』を、組織と団結を表す『井桁』と完全を表す『円』で囲んだもの。江戸時代に制定され現在まで脈々と受け継がれています。伊藤銀行は昭和１６年旧愛知銀行と旧名古屋銀行と合併して『東海銀行』となりました。

今回の講座では昭和の、それも私の知らない多くの分野について学ぶことが出来ました。ありがとうございました。